

## スエトーニウス「カイサル傳」の文獻的性

### 格に関する若干の問題（一）

日 臺 礮

#### 一

スエトーニウスの形式は今日でこそ伝記的叙述には全く適さないものとされているが、古代及び中世に於ては、單なる歴史ではなく伝記と云う意味を持つ皇帝史が書かれる限り、兩時代を通じて君臨して來た。通称「皇帝史」 *Historia*

*Augusta* 詳しくは「諸作者著、聖ハドリアヌス帝よりヌメリアヌス帝に至る諸君主伝」 *Vitae Diversorum Principum et Tyrannorum a Divo Hadriano usque ad Numerianum a Diversis Compositae* の著者達がスエトーニウスの「皇帝列伝」 *De Vita Caesarum* を模範として、皇帝の系図、その幼年時代、その治世の政治的事件、その外貌等を順次に書き誌している周知の事實を始めとし、スエトーニウスは帝政時代のギリシヤ人並びにローマ人の歴史家に大いに利用された。而も單に資料に就いてのみに終らず、アウレリウス・ウィクトルやエウトロピウスに見られる様に、特性描写の原則そのものに及び、又、利用と云うよりはそつくりそのままの繼承或は僅かの修正を施した文の利用である為、何れの場合に於てもスエトーニウスの色調が少からず洩れ出る結果となつてゐる。而も之が古代のみに止まらず中世の奥深くに迄大なる影響を及ぼしている事實は、中世に於ける伝記、少くも皇帝伝の模範とされ追隨者を見たかのアインハルトの「カール大王伝」にその最も顯著な例を見るのである。<sup>(1)</sup>



彼は全体の構想並びに配列に就いてスエトーニウスの「皇帝列伝」中の「アウグスツス伝」に倣つて居るのみならず、夫々の表現に於ても特定の語句を借りて来て居る。筆者はかつてその模倣なり影響の程度なりが全体各章を通じて一様ではなく、具体的にはカールのいわば特性描写に集中している点を指摘し、且斯くの如き形式的構成並びに個性描写の方法に対しては、古代乃至中世に身を置いた内在的理解を以つて対すべき事を述べた<sup>(2)</sup>

少くも古代及び中世の帝王伝記に見られるような歴史家に対する影響のほか、同時代の文人達の之に対する評価<sup>(3)</sup>、或は又一般士人に対する普及と令名に見られる劃期的影響には少くもスエトーニウスとそれに続く時代に於いては、この様な叙述方法が統治者の人物の理解に適していると考へられていたと看做させるものがある。にも拘らず若しこの様な事が現在在の我々の立場から、歴史上の人物を理解する方法でないとされるならば、この様な形式の「甲冑」<sup>(5)</sup>が如何に我々にとり奇妙であり、又縁の遠いものに思われようと、此等の特性をその歴史的状況に於て理解し、その原文と就中思考過程の正確な解釈を通じて評価することの必要性は益々大くなるであらう。蓋し古代中世に於ては、一切の変化が終には悉くその中へ組み入れられ、時としては単なる時代的順序のみを表現するに過ぎない様な「発展」概念が絶対的な支配を行うと云う事はあり得なかつた。従つて又、人物も唯々その「発展」からのみ理解さる可きであるとする主張は必ずしも凡ゆる時代を通じて自明の事として承認されたものではなかつた。更に、私的個人的な事項を顧みるにも拘わらず、同時にそれ自身一般的な歴史の独立した一部であらうとする現代の伝記の傾向も、矢張り現代に於てこそ当然であり、又理解の為には其が要求されるのであるが、当時<sup>(6)</sup>に於ても一般的に所謂ゆる我々の歴史的關聯なるものが、さ程本質的なものと看做されてゐたか否かは改めて検討を要する問題なるが故である。

註 ① 拙稿、アインハルト「カール大王伝」の文獻的性格に関する若干の問題（青山經濟論集、二の二、四三頁以下）。② 前記拙稿四八頁以下、特に五三頁。アルファンの同問題に対する評価には古代中世に於ける「伝記」の性格に対する顧慮が充分とは言ひ切れな。L. Halphen: Eginhard 'Vie de Charlemagne' ③ 例せば小プリニウス書簡二、三、五、特に後者即ち本書の出版予



告の十一行詩に言及せる書簡の中 perfectum opus absolutumque 並に splendescit なる表現 ④ 例せば Ausonii opuscula ed. Peiper 1885, X V, 183 ⑤ H. Hoffmann: Karl der grosse im Bilde der geschichtschreibung des frühen M.A. (800-1250), Berlin 1919. s. 6 ⑥ 例えばプルタルコス対比列伝中アレクサンドロス伝中の歴史と伝記の比較論参照。(尚、青木巖訳プルタルコス英雄伝第一卷十一頁、生活社、参照)

二

十九世紀から批判的歴史記述が行われるのに際し、古代の諸文献はそれが新しい独自の歴史像を作り上げるのに役立つか否かと云う観点から仔細に亘る検討が行われ、その結果その大部分のものが、サルスティウス、リーウィウス、タキトゥス、而してヘロドトウスさへ次々と欠点が発見されて行きスエトーニウスも亦例外たり得なかつた。スエトーニウスに対する今日の非常に低い評価は以上の如く十九世紀に根ざしている。

然しこの十年間に於て前記の歴史家達は夫々の歴史的状況からその特色が益々よく理解され、又その原文と思考過程の正確な解釈によつて彼等歴史家に対して向けられていた非難から廣く救われ得たにも拘らず、独りスエトーニウスに対する評価は今日に至るも改められないで居るばかりか、今日迄に為されて来ている非難は無視し得ぬものの如き観を呈している。近代に於ける研究に於ては、年代学的顧慮に対して殊のほか重要性が置かれているが、スエトーニウスにはこの点の不充分さが指摘されて来ているし、又彼の叙述の態度に関しては、彼が単に事の詳細を伝えている丈で人物の素描、況んやその「発展」に関する叙述に対しては何ら意を用うる処がなかつたと云う点が指摘されて来ている。<sup>(7)</sup>

然し本問題に關聯する文献を涉獵し消化し尽して右の展望に備える事はさし当り筆者のよくなし得る処ではないし、又首題に關する研究に關しては恐らくはレオの<sup>(8)</sup>其れと共に今後の研究の基礎的文献となるものと考えられるので、先ずシュタイドレー教授の近著<sup>(9)</sup>に依拠しつつ前記の展望を行い、以つて前節の課題に対する一つの手掛りを得て行きたい。

スエトーニウスに対する一般的評価をシュタイドレーは次の如き見解をもつて代表せしめている。「スエトーニウスの



皇帝列伝に於ける諸皇帝の個性、行為及び閱歴に関する叙述は、なるほど部類別に章及び節と云う形で一目瞭然と配列されているが、この章及び節は夫々一種の自己目的を持つていて、章節の間には何の關係もなく、又その順序は表面的機械的な配列であるに過ぎぬ。箇々の事実でさえ幾重にも切り離され、しかもその切り離された部分は各々様々の箇所に、又相異つた章の下に組入れられてしまつてゐる。到る所唯々斷片あるのみであつて、どこにも纏りはなく、画を為す可き線はあつても、何等画にはなつていないのである。人物の全体も、又その内奥も共に明かにされる事なく、單に事實に次ぐ事實、引用文に次ぐ引用文と云う様に、事實と引用文が枚舉的に並べられてゐるに過ぎない。ローマの学識者の中で最も重要なその代表者であるウァルロに従えば、スエトーニウスは畢竟少しも叙述しようとしてゐるのではなく、彼にとつての問題は、唯々伝えられている資料を蒐集し、而も出来る丈完全に集め、そしてそれを読者に氣樂に接し得るものとする事丈である。然るにその蒐集さえ何の批判もなく行われている。歴史的環境が記述されてゐるのでもなく、又皇帝に対する側近者の影響が認められてゐるのでもない。一切の典拠は、その意義及び由来には何の顧慮もされずに並置されてゐる。その状態は、小冊子の書物や宮廷の噂話があるかと思えば、一流の、典拠原本、書簡及び演説の斷片又は公文書があると思ふに云う具合である。<sup>(10)</sup>」結局、「彼は眞の著述家ではない」<sup>(11)</sup>

パウリ・ヴィソワの古代学百科全書の中スエトーニウスに関する項に於いて細部に至る迄そのまま記載されている事實を始めとし、今日の殆どの文学史が、<sup>(12)</sup>スエトーニウスの伝記に關し基礎となし、従つてスエトーニウスに対する前述の如き一般的評價の重要な一翼となつてゐるのはLeoの「ギリシヤ・ローマの伝記」(一九〇一年)<sup>(13)</sup>であろう。彼は、ギリシヤ・ローマの伝記に対して行つて來た委細を尽した考察に基いて、スエトーニウスの特徴、即ち資料を章節によつて幾つかの主要部へ部類別に区分する方法に關する考察を行つてゐる。

<sup>ペリパトス</sup>逍遙学派に於ける文筆家についての完全な美的構成を有する伝記を一応除くと、レオの見解によれば伝記には二つの主要な形式が存する。その一つは同じく<sup>ペリパトス</sup>逍遙学派に由来するが、資料を年代順に扱い、美的に構成して行くもので、通常そ



の生涯を公事に捧げた人物に対して適用され、プルタルコス<sup>(1)</sup>の伝記が、後に於けるその特色ある例である。他の一つはアレクサンドリアの文法家達によつて生み出されたものであつて、資料を科学的に扱い、その叙述は大体年代順ではなく部類別であつて、美的構成は少しも顧みない。而して此の形式は分けても資料蒐集に適し、専らアレクサンドリア時代以降の文筆家に対して適用される。此の形式の伝記の構成は次の如きものである。即ち(1)夫々姓名及び血統を取扱つた後、多かれ少なかれ年代順を相当考慮しながら生涯を頂点に至るまで物語つて行き、(2)それから所行、(3)人物、と云う主要部を部類別に叙述し、最後に(4)死去及び死後、を続ける構成を持つていようである。

スエトニウスは文法家であり、従つてこのアレクサンドリア形式には充分精通し、その著「名士伝」*De viris illustribus* に於てはあらゆる種類の文筆家を取扱つたのであるから、実際にも絶えずその形式を利用した筈である。恰も皇帝列伝に於てこそ本来なら年代順的叙述形式が相応しいのであつたかもしれないのであるが、スエトニウスはこの皇帝列伝に於て敢て初めてアレクサンドリア形式を政治家に適用した。そして現代の研究から非難される凡その欠点も此の様な失策から生じたものであらうと説明されている。皇帝列伝の解釈を骨子とするレオのこの研究は誠に劃期的なものであつて、その論証は Theiler の言葉を借りるならば「思はず手を握りしめるような、殆ど無気味に近い印象を受ける」ものであつた。<sup>(15)</sup> 従つて爾後の研究はレオを出発点とし如何にしてレオから抜きん出るかにあつた。然し最近に至る迄レオの成果は抜き難く、たとえ疑念が表明されてもそれはほんの時折りにしかな過ぎず、而も見逃してならぬ事は、レオにとつて最も重要であつたスエトニウスの分類及び理解と云う点に関しては、一、二の例外を除き、何れの学者も触れてはいなかつたのである。而して従来正当視する事に何等疑念をさしはさむことの試みられなかつた、レオの恰も考察方法の基礎に對して分析を行い、古代文学に對する形式的要素の意義に関するレオの過大評価を衝いたのがシュタイドレーである。然し我々はシュタイドレーを採り上げる前に一応それまでにレオに迫つた人々の業績に触れなければならぬ。

最初にレオの説に對し疑念が表明されたのはパピルスに書かれたサティロス<sup>(16)</sup>の伝記が発見された時である。この伝記は



対話形式を選ぶ事によつて美的構成を得ようとするに留まらず、更に部類別の組織をも持つて居たのであるが、この様な形式は、レオによるならば本来科学的、資料蒐集的伝記にのみ許さる可きものであつた。従つてレオは逍遙学派ペリパトスとアレクサンドリアの学者との間を結ぶ一種の中間部と解釈しようと努めた。<sup>(17)</sup> Weizsäcker のレオに対する非難は先ずこの点を衝いたのである。<sup>(17)</sup> 彼は立入つてレオの主張を實際的に論究する事は聊もしなかつたのではあるが、レオが右の様な決定を下す事自体が彼自身の論拠を破壊していると非難したのである。更にプルタルコスすら純粹に年代順に進んでは居らず、レオの謂う單なる附説では決してないような至つて純粹に記述的な部分が含まれて居り、而もこの部分では恐らく人格的特色、外的生活状態、世界観、著作、更には政治的業績を扱う事が出来るのであるが、これもレオによれば年代順的な敘述のみがそのような事柄に対して標準たる事を許されているのである。

ヴァイツゼッカーに先立ち Uxkull-Gyllenband も余り成功はしなかつたが、特に逍遙学派一般による政治家に関する伝記の存在に対し異論を唱え、我々の有している文献からはその存在を証明する何の根拠も見出せず、かかる伝記は恐らくポリビオスの時代に至つて初めて成立したもので、而も当初のものは「素朴な頌詞」であり、プルタルコスはそれを逸話風に拡大したものであると考へているのである。<sup>(18)</sup> 然しスエトニウスの思考過程に関してはそのまゝレオを引き継いでいる。彼はプルタルコスの伝記の核心をなす單純な歴史的部分とその逸話的な敷衍の部分とを分離する事に論考の中心をおいたが、彼の伝記の歴史に対する推論には遂に確固たる根拠が認められなかつた。<sup>(19)</sup>

シュタイドレーの見解に従うならば Babru の見解も同様信ずるに足る成果を挙げ得なかつた。彼は Uxkull を更に一步進め、ヘレニズム全体に関して政治家の伝記の存在を否定している。而して彼も前者同様プルタルコスに於ける逸話的なものと歴史的なものとの分離せしめんとする際の操作及び文献分析に於ける解釈の不明確さに於て欠隙を晒している。因みに今後に於ては恐らくはヘレニズムに於ける政治家の伝記の有無と云う問題が一般に一の中心的課題となるであろうと思はれる。



スエトーニウスを取上げ而も著しく形式史的立場に立つたレオとは対蹠的に、伝記的特性描写を問題の中核に据えつゝ尤もシュタイドレーによればそれは意識的であるよりは直観的であつたが——恰もレオの如き見解が成立するのはスエトーニウスの文法家的蒐集熱が顕著であつたが為に他ならぬ事を論証すると共に、スエトーニウスの中にはローマの伝統、殊に讃辞 (elogium) と弔辞 (laudatio funeribus) の影響が存する事を実証しようと云う注目す可き試みを為したのは Stuart<sup>(21)</sup>であつた。然し彼のスエトーニウス及びタキトゥスのアグリコラに関する推論は余りに単純過ぎ且あり得可きギリシヤ的影響への顧慮が欠けて居る点が批判を招いた。<sup>(22)</sup>

註

① 十九世紀末以来出版されて来た主な著作としては H. Peter, Die geschichtliche Literatur über die römische Kaiserzeit

II. 1897, 69ff., 328 ff.: A. Macé, Essay sur Suetone, 1900, 54, 239, 322, Schanz - Hosius, Gesch. d. röm. Literatur

III. 1922, 50; G. Funaioli in Raccolta di scritti in onore di F. Ramorino, Milano 1927, 1ff.; in R.E. IV 612ff.; A. Klotz, Gesch. d. röm. Literatur 1930, 305ff.; F. Bickel, Lehrbuch d. Gesch. d. röm. Literatur, 1937, 228. ;

Butler-Cary の Kommentar zur Divus Julius, London 1927, ; ケンブリッジの古代史第十一卷七四二頁以下の Sickes の見解はスエトーニウスの業績を比較的非凡に評価。 G. W. Mooney, Suetoni de vita Caesarum VII-VIII, London 1930,

16ff. ② F. Leo; Die griech. - röm. Biographie, 1901, ③ Wolf steidle; Sueton und die Antike Biographie München 1951, Zetemata Heft I. ナー (Z-1) ④ (Z-1) s.2 ⑤ 同上 ⑥ 同上 s.6 ⑦ 註⑧参照。 ⑧ 同上、特に s.1ff., 15f. 141ff., 268f., -315ff. ⑨ W. Theiler, Gnomon. 1929, 286: (Z-1) s-3 ⑩ Nach. d. Gött. Ges. d.

Wiss., phil-hist. Kl. 1912, 273ff.; 287. (Z-1: s.7) ⑪ A. Weizsäcker; Unters. üb. Plut. biogr. Technik, Problemata 2, 1931, 81f. ⑫ W. Uxkell-Gyllenband; Plut. u. d. gr. Biogr., 1927, 91ff. 105ff. ⑬ (Z-1) s.8., F.

Jacoby: H.Z. 139, 1929, 186: A. Hauser, Burs. Jahresber. 251, 1936, 54 ⑭ (Z-1) s.8: N. Barbu: Les procédés de la peinture des caractères et la vérité historique dans les biographies de Plutarque. Paris 1934, 11ff. ⑮ 宛其以授 ⑯ W. Ax; Gnomon 1938, 142ff. ⑰ Stuart; Epochs of greek and Roman Biogr. ⑱ (註) ⑲ 参照 (Z-1) s.8



レオの考察方法の基礎を分析しそこに働いている幾つかの仮定を見出す事によつてその形式的要素の過大評価を衝き、特にスエトーニウスに関する彼の分類及び理解を批判の対象とし、且自らは「皇帝列伝」の形式を他の伝記的關係から、具体的にはその中の「カイサル伝」と、プルタルコスと同じ対象を扱つた伝記との対比から、スエトーニウスに於ける構成的特性描写の意図の有無、及びその程度を検討し、進んではスエトーニウスの古代伝記に於て占むる位置如何、別しては伝記に於けるローマ的なものを明かにせんとしたのは、他ならぬシュタイドレーであつた。

彼によれば、文学上の「種類」と云う概念は實は古代のものであつて、アリストテレスの詩学の中に表現されたものが典型を為すと考えられている。<sup>(23)</sup>然し乍ら理論上及び實際上、夫々の種類間の限界が少なからず無視され又は相互に移行し合う事も亦妨げられないのであるし、<sup>(24)</sup>更に決定的な事であるが、古代の中からは散文の中に於ける種類の限界を厳守しなければならぬと要求する確証は聊かも見出されないのである。

この様な法則の証拠としてよく引合に出されるアリストテレスの修辞学(3、12)も、著作様式と論争様式を區別している丈であつて之は何等「種類」ではない。更にアリストテレスは論争の中で公開演説と法廷辯論を區別しているが、之も様々な聴衆を問題にしているにすぎない。<sup>(26)</sup>公開演説と称してよい進言演説は一人若くは少数の国王乃至側近者の前で行はれる点からすれば、むしろ少数の裁判官を前にする法廷辯論と同様の形式と云はねばならぬ。演説が式辭、法廷辯論及び政治的進言演説に三分しても其は理論的事後的な分類であつて、決して此等の形式が實際上強い拘束力を持つとか、又は實際にそのような力を有するものとしてこれ等の形式が問題とされるのである。形式は創作を容易ならしむる手段であつて、決して作品の特質並にその価値を、その遵守如何によつて決定する様な法則ではない。然るにレオは常に外的形式を根拠として研究するにすぎず、登場人物の立場によつて、即ち内容によつて規定される諸条件を問題としてはいないとするのである。タキトゥスの散文、ローマ喜劇、戯曲に於ける独白、等に関する彼の諸研究には何れもこのよ



うな本質的特色が認められる。かくしてレオの態度は形式的要素の古代文学に対する意義と云う点に於て、その形式的要素を過大評価する傾向を持つていたとするのである。<sup>(26)</sup>

さて我々は彼のレオ批判を離れて「皇帝列伝」そのものに対する彼の見解を検討せねばならぬ。現代の研究は資料蒐集を以て科学的であると信じて居り、スエトーニウスもその様に考えていたのであるが、単なる資料蒐集が、古代中世を通じて、軽視す可かじかくも大きな而も単に学問的であるに留まらない影響を持ち得たとする事は最初からあり得ぬ事であつて、軽視す可からざる批評家 Friedrich Schlegel も「批判的なスエトーニウス」を「歴史的人物評論に於ける最も優れた大家」と呼んで居るし、<sup>(27)</sup>又今日単なる資料蒐集の爲でなくて、ローマ諸皇帝の性格描写が興味ある形で示されているため、卒直に楽しもうとする読者もある。かくして前述の一般的非難の中若干のものは初めからその意義を著しく弱めている。<sup>(28)</sup>

次に主要部分に於て年代学的顧慮を欠いていると云う非難は、凡そ古代伝記全般を通じての特徴であつて、時代順と云う事を大いに強調しているプルタルコスに於ても見られるところである。従つてそれを特に取り立て、スエトーニウスの責に帰する事は出来ない。まして彼は皇帝一人一人の経歴について、即位に至るまでの事を度々非常に精しく述べている場合<sup>(29)</sup>に於ては尙更のことである。

更に古代伝記と歴史の關聯が問題になるが、古代伝記に於て歴史的な關聯についての知識はせいぜい一般的描写に於て前提とされても差支えないと云う程度のものである。プルタルコスは既に伝記と歴史とは全くその目的を異にするものであつて、伝記は性格を理解すると云う目的のため、歴史とは異つた道を辿り、屢々性格を照し出している、明かに些細な横枝の爲大きい行為を輕視せざるを得なくなる、とはつきり述べている。<sup>(30)</sup>注目せねばならぬのは、スエトーニウスが諸皇帝の帝位繼承を述べようとしているにも拘らず、彼を批評する人々はこのような見地を看過している事である。更に重要な点は、歴史に大きな関心を持ち、従つて当然それ相当の歴史知識を前提としているローマ人を対象として彼が書いてゐるにも拘らず、現代の批評家達は何の故もなくこのような彼にローマの歴史的背景の敘述を要求しているのである。



スエトーニウスに対する他の非難は、一見とるに足らぬ様な事柄を描写する事に興味を持つてゐる点、即ち私事に関する詳細、隠された諸々の不善、特に情事に関する不善を探し出そうとするいはゞ彼の好奇心に対して向けられている。然し好奇心と云うものは殆ど何の伝記の態度にも、否、苟も人間を個人的に評価する場合に必然的に随伴する現象である。最もこの点に関しプルタルコスはより上品である。然し編著の意図に於てプルタルコスは自ら認めている如く、人物を理想化しようと欲しているものであり、而も述史の対象は遠い既に屢々理想化され来つた過去に属する人物であつた。然し君主の寢室に関する好奇心は何れの時代に於ても大きいものであつて、プルタルコスに於てもその例外を為した訳ではない。両者の相違の依つて来る処は、ローマ人の場合かゝる表現は首尾一貫して部分的に詳しく殊に細大洩らさず情事に立入るのを常として居るのに反し、ギリシヤ人に於ては一般的な、くどくない敘述に留め、その詳細に立入るのは常に特に注意を惹く事実についての場合丈である。<sup>(31)</sup>以上の点から、古代諸文献中独り取り残されたスエトーニウスに対する再検討を要望して居る。然し彼が中心的な課題としてゐるスエトーニウスに於ける構成的特性描写の意図の有無並にその程度の検討、ついででは古代伝記に於けるその位置付けの問題を吟味する為には更に彼と共にカイサル伝に関するプルタルコスとの比較に進まねばならぬ。

註、<sup>(23)</sup> (Z-1) s.4 詩学、1回入q、11回頁以下、(Z-1) s.4 <sup>(24)</sup> Steidle: Studien zur Ars poetica des Horaz, Berlin 1939. 46ff. (Z-1) s-4. ホラーティウスのピソー宛書簡(八六、九三以下等)或はエウリピデース・ヒポテセイスの序言等は何れも之を認めてゐる。<sup>(25)</sup> 三・一一、五 (Z-1) s.-4 <sup>(26)</sup> (Z-1) s.-5 フト。<sup>(27)</sup> Athenaen I. 2, 43 <sup>(28)</sup> (Z-1) s-10. <sup>(29)</sup> 同上 <sup>(30)</sup> Alex. 1. 2f.; Nik., 1. 5; Galba 2, 5; Nepos Pelop. 1.; Polyb. 10, 21, 5ff. <sup>(31)</sup> (Z-1); s-12. (編輯の都合上、以下次号に譲る。尙紙数の関係上、註の多数を削除せねばならなかつた。将来稿を改むる際考慮し度い。)